

4-9 東海地方の微小地震の分布(1979年11月1日～1980年4月30日)

Distribution of Microearthquakes in Tokai District

(November 1, 1979-April 30, 1980)

名古屋大学理学部
School of Science, Nagoya University

1. 1979年11月1日より1980年4月30日における東海地方の微小地震活動

第1図は1979年11月より1980年1月までの3ヶ月間、第2図は1980年2月より4月までの3ヶ月間に名古屋大学理学部の地震観測テレメータ網によって観測された微小地震の震央を深さ別に示したものである。以下にこの期間における地震活動の特徴を述べる。

- (1) 前報¹⁾と比較して内陸の地震活動に大きな変化は見られないが、遠州灘における微小地震の活動は1979年8月頃よりそれ以前に比較してやや活発になっているようである。
- (2) 御岳南部における群発地震は定常的活動がみられた。
- (3) 静岡県西部、駿河湾周辺地域および伊豆半島には特に目立った活動はない。

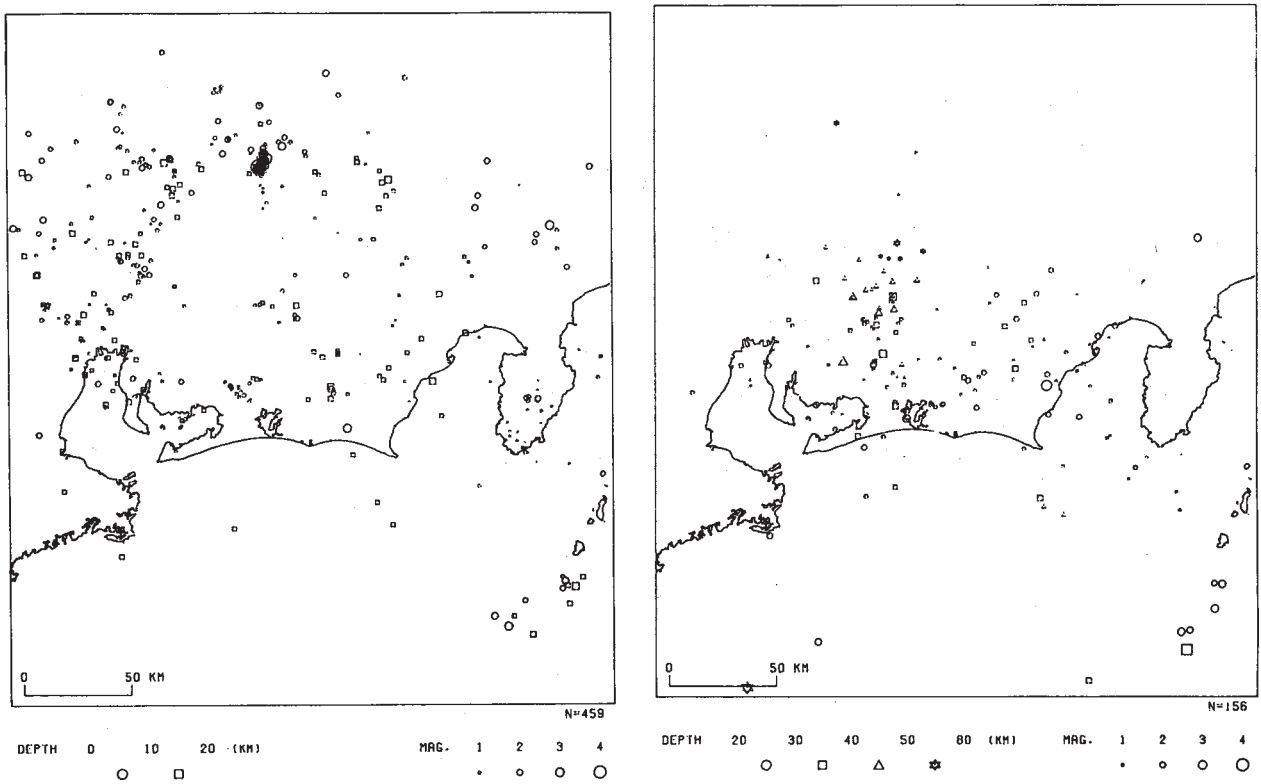
2. 愛知県・岐阜県を中心とした地域における活断層と微小地震の分布

1978年より $M \geq 2$ の地震についての観測は一様性があり、震源決定精度も向上している。地殻構造の地域性により系統的な誤差はさけることができないが、震央精度は2～3km以内と推定されている。この程度の精度であれば、活断層との関係も明瞭になると思われるので1978年1月より1979年4月までの震央分布図($M \geq 2$)に岡田(1980)による同地域の活断層をプロットしてみた。結論を要約すると次のようになる。

- (1) 三河湾から養老山系を通過して敦賀にぬける敦賀湾-伊勢湾断層系は地震学的にみても活発である。
- (2) 図中Uの濃尾地震で動いた断層の隆起側(西側)、深溝断層の隆起側では余震活動が継続している。また知多半島北部の地震多発域も鳴海-天白川(N)、伊勢湾断層等には含まれた隆起域にあたる。この活動は余震活動ではない。
- (3) 関ヶ原断層(S)ではその両端において地震が多発する。谷汲断層(T)の西側も同様であるがその西端から西南西にのびる活断層およびその北側に地震が密集している。
- (4) 今回の調査期間では養老断層(Y)より一志断層(B)の附近が活発であった。
- (5) 名古屋市より北東にのびる活断層系には地震の発生が少ない。

参 考 文 献

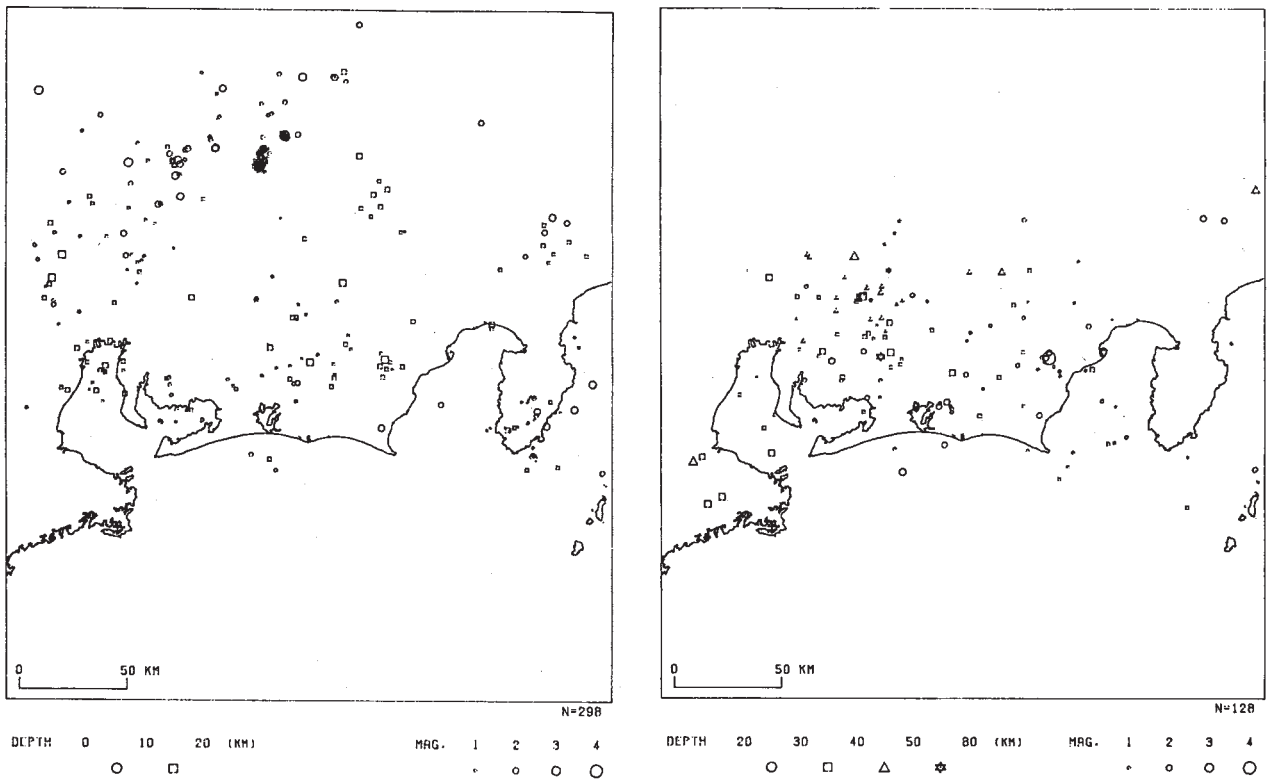
- 1) 名古屋大学理学部：東海地方の微小地震の分布（1979年5月11日～10月31日），連絡
会報，23（1980），80 - 82.
- 2) 岡田篤正，1979，愛知県地の質地盤（その4），愛知県防災会議地震部会



NOV 1 1979 - JAN 31 1980 (NAGOYA UNIV)

第1図 微小地震の分布（1979年11月1日～1980年1月31日）

Fig. 1 Epicenter distribution of earthquakes (November 1, 1979 - January 31, 1980)

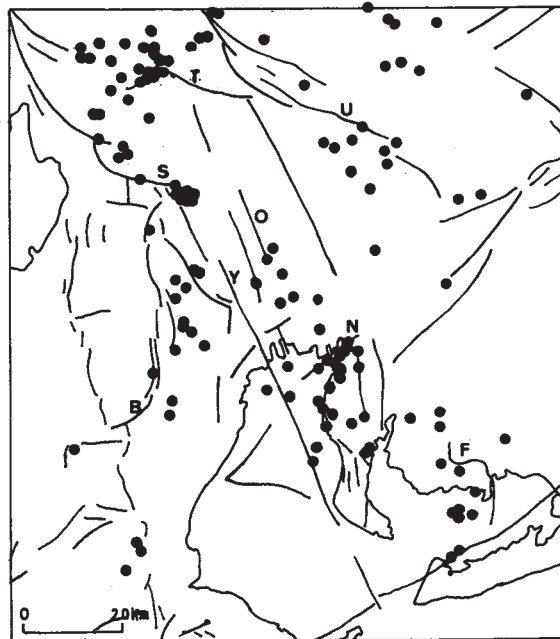


FEB 1 1980 - APR 30 1980

FEB 1 1980 - APR 30 1980

第2図 微小地震の分布 (1980年2月1日~4月30日)

Fig. 2 Epicenter distribution of earthquakes (February 1 - April 30, 1980)



第3図 M2.0以上の浅発地震の震央分布と活断層分布との関係 (1978年1月~1979年12月)
 U; 梅原断層, T; 谷汲断層, S; 関ヶ原断層, Y; 養老断層, N; 鳴海-天白川断層, F; 深溝断層, O; 大藪-津島断層, B; 一志断層

Fig. 3 Relation between active faults (due to Okada, 1980) and the epicenter distribution of microearthquakes ($M \geq 2$) from Jan. 1978 to Apr. 1979.